

人間の活動が人間の環境を壊す

今年2月に国連「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)がまとめた報告書『気候変動2007—自然科学の論拠』は、「20世紀半ば以降の温暖化は、人間の活動による温室効果ガスの増加によってもたらされた可能性がかなり高い」と言い切った。

それでは、人間の活動が、われわれの内部環境に与えているダメージはないのだろうか。私は、日本をはじめ多くの経済大国で問題となっている「学びの崩壊」ま

たは「学びからの逃走」は、成長経済が豊かさ、快適さ、利便さと同時にもたらした人間の内部環境へのダメージなのではないかと感じている。

「学びからの逃走」とは、教育学者の佐藤学氏が、E・フロムの『自由からの逃走』と重ねて、学びの場の問題状況を表現して用いたものだ。それは、無力感や孤独感、不安や動揺に苦しむ20世紀近代人が、苦闘の歴史の中から勝ち得たはずの自由な市民としての立場を簡単に捨て、ファシズムや機械人へと流れていった社会状況を表現していた。そして今、希望が持ちにくい格差社会の中、「義務教育」を「教育を受ける義務」ととらえる誤解がまかり通る日本の状況は、まさに「学びからの逃走」という表現が当てはまる。

しかし、学びからの逃走をこのまま放

置してはならない。特に、次世代を担う学び手である子どもたちを、学びに回帰できるようにすることは、現代日本社会の最優先課題と言っても過言ではない。

ローレンツの警鐘「人間の八つの大罪」

科学技術の発達による文明社会の進展と、その社会を構成する人間という動物の生き方の問題を考えるとき、思い起こされる書がある。ノーベル賞受賞者でもある動物行動学者K・ローレンツの『文明化した人間の八つの大罪』だ。

「学びからの逃走」という言葉が当てはまる、日本の教育をめぐる現状。次代を担う子どもたちが「学びから逃走」するのを放置してはならない。では、彼らを「逃走」から「回帰」へと向かわせるには、どうしたらいいのだろうか？ 学びの場の中心である「学校」をガバツと変えるのが「改革」なら、その周辺から「コツコツ」と進めていく「改善」という方法もあるはずだ。

中間 真一 H R I 社会研究部 主任研究員

学びの場を改善しよう

- ① 人口過剰
(過剰な人口が人間らしさを失わせる)
- ② 生活空間の荒廃
(地球環境破壊の問題)
- ③ 人間同士の競争
(競争社会とモラルの欠如)
- ④ 感性の衰減

(不快を排除することの危険)

⑤ 遺伝的な類廃

(幼児化や家畜化)

⑥ 伝統の破壊

(文化継承の断絶)

⑦ 教化されやすさ

(マスメディアに流される価値観)

⑧ 核兵器

(人類を自滅させる科学技術開発)

人間の活動が、人間に必要な内外の環境を破壊しつつある。まさに現代的であり近未来予知的な警鐘だ。自然科学者が、人間という動物の原点から発したこれらの警鐘に対して、私たちは真摯に耳を傾ける必要がある。そして、破滅的シナリオを回避して、新たな豊かな社会を実現する生き方に向かうための改善を進めなくてはならない。

さらに、これらの8項目を見渡すと、どの項目の指摘も現在さまざまな場で議論されている「教育の問題」と重ねることができると気づく。次代を担う子どもたちが、未来に向かって「生きるための力」を身につけるための「学びの創造」そして「学びへの回帰」のための警鐘である。

生きるための力としての「学力」

「生きるための力」というあいまいな言葉を持ち込んだが、これは、以下の三つの力が相互に作用しあつて生まれてくる力ではないかと私は考える。

生き抜く力(生命力・突破力・身体力)
生かす力(編集力・応用力・表現力)

関わる力(伝達力・対話力・感受力)

これらを再編成して、「野性」、「知性」、そして「感性」の3拍子がそろうと言っても構わない。また、もちろんこれらの力が備わるためには、それを支えるのに必要な知識や情報基盤が身につけられている必要がある。私のとらえる「学び」とは、これらの力を身につけることである。

これに関連して、本誌インタビューで訪問した東京大学教育学部附属中等教育学校の学校案内を思い出す。そこには、教育目標として「ことばの力」、「論理の力」、「身体・表現の力」、「情報の力」、「関係の力」という「五つの力」が掲げられていた。これらの力を、教科学習と総合学習を通じて育成するとうたっている。そのために必要な場を用意して、子どもたちの学びを支えることが学校の使命だというわけ、とても共感を覚えた。

それでは、果たして現在の学校、公教育の場では、先に示したような「生きるための力」が、育まれているのだろうか。残念ながら多くの学びの場で「否」と答えざるを得ない現況だろう。それどころか、学力低下のみならず、いじめ問題の深刻化など、学校教育問題は複雑化の一途をたどっている。学校現場は迷走状態に入り、混乱の様相を増すばかりだ。

もちろん、学力低下問題は、極めて重要な問題として扱われ、対応が進められ

ている。しかし、その発端となっている「学力」はいまだOECD「生徒の学習到達度調査」(PIISA)や、国際教育到達度評価学会(IEA)の国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)のスコアによる諸外国との比較から抜け出せていないのではなからうか。これでは、「学力」の一面面としての「学んだ結果」への対処療法的議論にとどまつてしまい、総体としての「学力」の向上を見誤つてしまう。

本誌巻頭で、佐伯胖先生の次の指摘はとても説得力があったために、心配も高まった。日本の子どもたちが目に見えてどんどん低下させているのは「学ぶ力」であり、「勉強力」ではない。「わからうとする力」が、どんどん低下しているのである。これに対して「基礎学力の強化」や「外部評価の徹底」、「学校間競争の積極推進」という「勉強主義」の強化によって防ごうというのは、とてもなく見当違いであり、明らかに逆効果であると主張されていた。

「学んだ結果(勉強の結果)」以外の学力として、「学びへの意欲」や「学びを持続的に発展させる力」を話題にしても、具体的に即効性のある対策に結びつかないという事情もあるだろう。しかし、成果がわかりやすい手段は、時としてそれが目的であつたり、すべてであるかのように感じられてしまう。ここで真の学力向上への方向を見間違ふことは、知識社会へとパラダイムシフトが進行中の現在、致命的

なロスになりかねない。

公教育からの逃走が始まっている

このような公教育の混乱の中、大都市部においては公立中学校離れが進んでいる。大手進学塾の試算によると、今春の首都圏一都三県の中学校受験者数は、子どもの数は少なくなっているのに、5万人を超えて過去最高となったという。小学校6年生の6人に一人が中学校を受験するという計算になり、都区部に限れば3人に一人ともいわれる。この事態は異常なのだろうか。

公立学校が地域に整備されていないが、高い費用を負担してまで多くの家庭が私立学校に進学させようとするのは、特に海外の人々から見れば異常に映るだろう。塾やマスメディアの勢いにのみこまれて「お受験」に盲目的に突っ走る一部の親子の様子は、確かに正常な子どもの生活とは思えない。しかし、大半の普通の当事者家族にとっては、正常か異常かではなく、やむを得ない選択なのだ。

教育を論じる大人たちは、時間をかけてでも最善の問題解決に取り組めばよいだろう。しかしその間にも、次から次子どもたちは学びの場に入つては巣立っていく。彼らにとつては、待ったなしの学校生活の時間であり、学校生活のやり直しもきかない。だから、子どもの成長を心から願い、案ずる親が、公教育の現況に不安を

感じて、少しでも安心して託せそうな私立学校進学を選択することは、当然の帰結と見ることもできる。

そのような、中学受験というマーケットが急成長する中で、進学塾も激しい競争と急成長が続いている。ここでは、ビジネス拡大志向の一部の大手塾を中心に、学ぶ内容や教え方よりも有名校への合格者数を目玉にして集客が図られる。このあたりの事情は、長年の塾経営経験を持つ教育評論家の小宮山博仁氏に寄せていただいた本誌「塾は学びの場なのか」に詳しく、「教育の場に市場原理を持ち込むことによる弊害の最たるは、勉強とは外発的動機によってなされるものだということ、子どもたちに刷り込まれてしまう

ことだ」という指摘は、とても現実感がある。これでは、中学に進学してからも、なかなか内発的動機による学びへの転換が難しい。

やはり、本質的な問題解決には、少なくとも安心して子どもが学びに取り組める教育の再生、特に初等中等教育における公教育の再生が不可欠だ。その上で、塾の本来の価値、新たな価値も現れ得る。元来、私塾とは福沢諭吉の慶應義塾、吉田松陰の松下村塾、緒方洪庵の適塾にせよ、伝えたい塾長の思いと学びたい塾生の思い、双方の内発的動機同士が交わる学びの場であつたはずだ。この原点に帰れば、塾はこれからの時代に合った学びの場として、大きな可能性を秘めている。拡大

志向のビジネス原理からは、実現困難であろうが。

「お得な学校」で何を学ぶか

それでは、私立の中高一貫校に進学すれば、本当に先ほどの「生きていく力」が育まれるのだろうか。「生きていく力」をものさしにして見るならば、私立学校に進みさえすれば育まれるとは限らないようだ。5万人を超える受験生に対して募集生徒数は4万人強、少子化の進む中で各学校は少しでも優秀な学生を確保するのに躍起だ。ここでも目玉になるのは、教育理念や校風よりも、誰にでもわかりやすい難関大学進学者数だ。中には、難

関大学合格者数の目標を設定し、中高6年間で最も効率よく受験勉強に取り組めるカリキュラムを堂々と掲げる学校もあるようだ。そして、マスメディアは入学しやすく大学受験に有利な学校を「お得な学校」としてもてはやす。それは、本当に「お得」なのだろうか。

昨年後半、次々に発覚した高校の未履修問題は、その実態を物語っていた。一方では数値目標を掲げて進学実績の必達を求められ、一方では指導要領通りに網羅された授業を求められる。市場原理と教育制度の狭間で、現場は混乱しているのだ。

果たして、受験科目の授業に集中することは、学びにおいて「お得」なのだろうか。

か。そもそも、高校における必修科目の減少と選択科目の増加は、「一人ひとりの個性を伸ばす」ためにカリキュラムを改編した結果だと聞く。しかし、その実は多くの高校で受験に有利なカリキュラムが編成されていたのだ。驚いたことに、高校生の物理の推定履修率は、もはや3割に満たないという。

私の高校時代を振り返ると、まだのどかな教養主義が残り、大学受験が必要なかったこともあつて、数学もⅠからⅢまで、物理、化学、生物、地学といった理系科目も、政経、倫社、地理、世界史などの社会科も、現国と英語に独語、古文、漢文も、芸術科目もすべて学ぶ機会に恵まれた。しかし、私の授業への参加態度は残念ながらきわめて消極的で、当時はありがたいことだとも思っていなかった。要するに、当時の私にとっては退屈でムダだった。

しかし、齢を重ねるほどに、人生経験を積むほどに、かつてのムダから価値を感じる機会が増えてくる。微かであつても、基礎に覚えがあるのと、まったくないので、ものごとを考えるときに圧倒的な差があると実感できるのだ。少なくとも、チャンスを逸さずに済む。学びから得られるものを考える上で、この時間的スパンの大きさも重要だ。しかし、時代は刹那的な競争に追われ、教育も市場原理にのみこまれていく一方だ。

それでは、進学塾、中学や高等学校の先にある大学ではどうだろう。理工系学

部の教授の知人たちから耳にした話だが、彼らは一様に最近の学生の学力低下を嘆いている。

私が「昔から、俺のような勉強しない落ちこぼれは、少なからずいたじゃないか」と言うのと、「勉強しないからできないという、明らかな因果関係があつたのが俺たちの時代。最近、入学者の偏差値だつて上がっている。その上、まじめに授業に出てきて、まじめに取り組んでいるように見える。そんな連中の学力が足りないから手に負えない。その結果、大勢の留年者や退学者を出すことになり、雑用は増える一方。今の大学には、ごく一部の優秀な学生もいるが、かなりの数のダメな学生もいる」と言う。

さらに彼らは、「専門科目のための基礎力や応用力もなく、そうかと言って幅広い教養に深みや厚みがあるわけでもない。地頭ができていないってことだろう。研究室の選択にしても、研究テーマへの好奇心よりも、就職先やメンバーのレベルを気にしている。要するにいまだに偏差値の延長線上にいる」と嘆くのだ。これが難関大学合格者数にカウントされるような大学生の実情らしい。3割を切つたという高校生の物理の履修率を思い出してしまった。

ムリ・ムダ・ムラに価値がある

事ほど左様に、学びの場の中心たる学校から現状を見回そうとすると、なか

か未来に向けて安心と信頼のおける学びの場、生きるための力を育む場を見つけ難いのが現実のようだ。なぜ、こうなつてしまったのだろうか。

私は、先ほどから登場する「お得な」とか、「効率のよい」「役に立つ」または「快適な」という価値の偏重が、学びの現場を蝕んでいるのではないかと危惧している。これらはすべて経済論や機械論の価値だ。いつの間にか、人間論や生命論の価値を忘れてしまつていないだろうか。もちろん、両者のバランスが必要なのは言うまでもない。しかし、人間論・生命論よりも経済論・機械論を偏重するものさしを標準とする社会の流れの中で、最もダメージを受けやすかつたのが、教育や医療、福祉などのケアにかかわる分野ではなからうか。

ローレンツは言っている。「快を求め、不快を避ける本能的な衝動であまりにも成功しすぎるのは決して良いことではない」と大賢人たちは、太古の昔に正しく気づいていた。高度に発達した文化を持つ人々は昔から、不快をもたらずあらゆる刺激を避ければ、危険でしかもおそらくはしばしば文化の衰退に通じる虚弱化が引き起こされるかもしれないということを理解していた」と。

人間が力強く生きていくには、乗り越えるべき適当な障害が必要だというメッセージだ。障害と言わずに、ムリ・ムダ・ムラと言つてもよい。私自身、工場のIE(生

産技術)を出発点とした人間として、ムリ・ムダ・ムラは徹底して排除すべきものと教えられてきたが、何かしら引かかるものもあつた。

しかし、私の恩師である川瀬武志先生が、ホームページ「IE小話」で書かれていた以下のコラムを読んで、私の中のモヤモヤは晴れた。

「改善活動の価値は効率(efficiency)だけではありません。効果(effectiveness)が重要なこともあります。効率が利得とそれを得るために払う犠牲との比率であるのに対して、効果は犠牲の如何にかかわらず達成しなければならぬ結果のことを言います。例えば安全、品質、納期、量といったものです。戦争やF1レースのタイヤ交換は良い例です。当然効果を達した後で効率を追求することになりますが、効果問題の多くはムリ・ムラ・ムダを承知で取り組まれます。この場合にムリ・ムラ・ムダを排除しようとするとき間違つた方向に進んだり、望ましいアイデアが出ないことになります」と述べられていた。

まさに今、学びの再生に求められているのは「犠牲の如何にかかわらず達成すべき結果」としての「生きるための力」ではないだろうか。そこでは必要とされるムリ・ムダ・ムラがある。それらをあんばいよく子どもたちに課す場こそ、学びの場であり、その中心にあるのが学校ではなからうか。「お得な勉強」を最高の「パフォーマンス」でこなし、難なく「スルツとポ



ン」で次工程に送る教育では、生きるための力を備えた、たくましい人間が育まれるとは思えない。自ら考え、障害を突破し、その結果を他者に伝えて共感を得られるような、歓びにあふれた学びが必要だ。即効性の「お徳感」だけでない、忘れた頃に効能に気づく、口に苦い漢方薬のような学びも必要だ。

そのように考えていくと、問題は「学び」だけではない。及川研先生の論考にも見られる通り、実は「遊び」の世界でも「遊びからの逃走」が始まっている。本誌で紹介されている「プレーパーク」や、木下勇先生にご紹介いただいた「ミニ・ミュンヘン」のような、遊びと働きと学びの入り交

じった取り組みの中には、よい意味での障害、ムリ・ムダ・ムラが散りばめられている。ミニ・ミュンヘンに参加する子どもたちが、最初に受ける講義が「けんかアカデミー」だという話は、とても示唆深い。さらに、ニートやフリーターの問題も「働きからの逃走」といえるだろう。自分探しの先に天職がスルッと現れるわけがない。

学び、遊び、働きから逃走させないために

こうして見てくると、子どもたちの生活世界では、学びからの逃走のみならず、遊びからの逃走、働きからの逃走も同時に起こっている。しかし、逃走の果てに幸

せは見えず、八つの大罪の恐怖がのしかかってくる。

やはり、逃走から回帰へと向かう道筋をつくらう。その道筋を、学びの中心であり本道となる「学校」からガバツと大きく変えようとするのが「改革」ならば、その周縁から、真の学びの場に向かってコッコンと「改善」活動を進めるやり方もあるはずだ。だれもが参加の可能性を持ち、達成する歓びを直に感じ得るのは、「改革」よりも「改善」にある。本号のテーマは、周縁から未来の中心に向けた学びの場の「改善活動」の勧めである。私たちの「てら子屋」も、小粒ではあれ、その改善活動の一つであり続けたい。そして、互いに

共感を持てるさまざまな学びの場のネットワーク「てら子屋共同体」のようなつながりが生まれれば、と想い描いている。

最後に、今年2月にユニセフ・イノチェンティ研究所が発表した「先進国の子どものたちの幸福度に関するレポート」から一つのデータを紹介しよう。「孤独を感じる」と答えた日本の子どもたち（15歳の割合は29・8%、OECD加盟25か国中、ずば抜けて高かった。ちなみに、本誌で取り上げた調査レポートの相手国スウェーデンでは6%に過ぎない。まずは、ばらばらになつて閉ざってしまった人間同士のつながりを、学びや遊びの場で再生しようではないか。

なかま しんいち

1959年生まれ。慶應義塾大学工学部管理工学科卒業後、富士写真フイルム㈱を経て、1991年よりHRI主任研究員。2005年、埼玉大学大学院博士課程前期（経済学）修了。「自律社会」をテーマに、科学技術と社会生活の関係から未来を展望する。また、国内外に未来の予兆を探索し、その現場づくりも手がける。「てら子屋」は、未来を拓く子どもたちの成長の場づくりとして1997年より活動を続け、次世代の学びの場の提案を目指す。共著書に「スウェーデン—自律社会を生きる人びと—」（早稲田大学出版部）